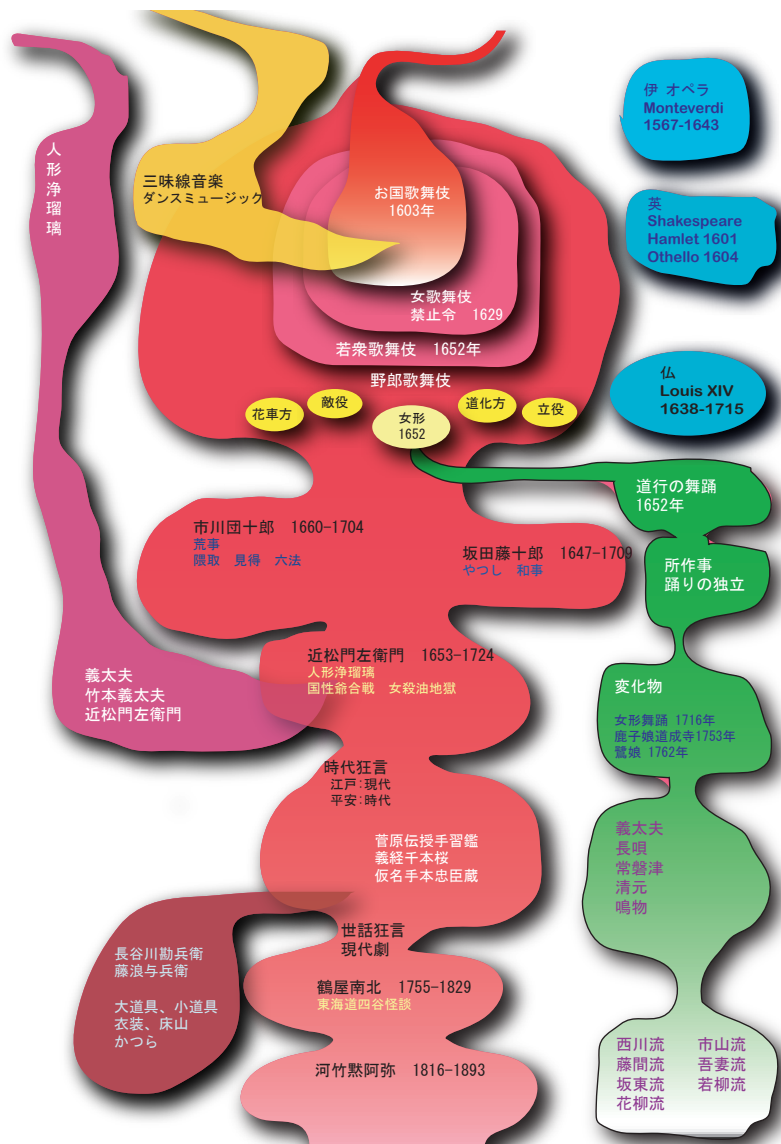


鶴屋南北作『東海道四谷怪談』より

私家版

『東海道四谷怪談』 21

小林 志郎 作



プロローグ「木下川の堤」

いつものように額堂、茶店、楊枝見世がある。多くの人が行き来する。乞食は所定の場所に座っている。商う人は道行く人に大きな声を張り上げている。

コーラスが登場し、殺人事件の物語を歌う。

コーラス 花火がはじけた

何発も、次から次ぎへと

花火が乱舞した

空間に色と色が重なり

花と花が、植物と植物が出現し

絶えることがなかった

やがて時がきて

花火が終演し闇が刷毛で塗り込められた

それでも花火の残滓が残った

やがて時がきて

一切が運び去られた

木枯らしが吹く頃

お岩は身籠もったことを知った

また花火の季節が来ることを心待ちにした

彼女の心の中には線香花火がチリチリと瞬いていた

滴のような形をした、小さなだいたい色の火種が

揺らめいている

彼女の夫は底意地の悪い態度を隠そうとしなかった

何度も、意識的な当てこすりを繰り返した

小さな火種を落とそうと

伊右衛門の九九は

二二が五

三三が十三

四四、十九

塩冶家が壊滅して職を失い

都会の雑踏の中を歩き続けた

二二が五

三三が十三
と唱えながら

彼の頭の中でも花火がはじけた
芝居を見ているとき
そばやで熱燗でのどを潤しているとき
彼の花火には繪がなかった
乾いた音だけが響いて
彼の神経をいらだたせた

四四、十九

五五、三十五

都会の雑踏と歌舞音曲が津波となって押し寄せる
社会は彼を正しく評価しない
彼の才能と価値を理解できないのだ
誰かが社会を変革すべきなんだ
そうすれば彼の算術は真実であることが証明されるはずだ
伊右衛門は英雄の出現を夢見た

妻は四谷左門町の長屋で
白湯をかけたご飯をいただきながら
音のない花火の繪を見続けた
夫は浅草の雑踏の中を九九を繰り返しながら
繪のない花火の音を聞き続けた

のう情けなや、恨めしや
身は煩惱の絆にて
恋路に迷い
ことによったら妻や義理の親の命さえ
己の欲を満たすため
平然と切り売りする狂気をば
この男は五つも七つをも懐にして
何食わぬ顔で義理の親の腰をもみ
妻の髪をすいて慈しむだろう

そんな怖さの白日夢
線香花火の火種がまたたき
浅い眠りの木下川べり
寄せ来る光の洪水に
お岩が正気を逸して掴みかかれば
伊右衛門は鎌取り直して土橋の上
襟髪つかんで一えぐり

情け容赦も夏の露
消ゆる姿の八重撫子

この時、赤子がおぎやおぎとはげしく泣く。お岩ははっと目を覚ます。夢の恐ろしさに身を震わせてから、赤子を強く抱きしめる。それから子守歌を歌いだす。

第一場「浅草観世音額堂のまえ」

「伊右衛門の歌」

コロス 伊右衛門のひとみに星が現れると
カラスが不吉に三度鳴く
星を見た人はもう戻らない

血のしぶきで真っ赤だぞ！
伊右衛門はもとは侍、塩冶の浪人
血をたっぷり吸った刀を提げている

お岩は小仏小平と不義をしたという
嘘だ、でっち上げだ
お岩が生んだ赤ちゃんはだれの子
惑わされるな
お岩、小平の道行きとござい
誰かが情報を操作している

四谷左門町、伊右衛門の家で
お岩が死んだ
お岩は按摩の宅悦と不義したという
噂はだれがたてた

蝉がみんな鳴く隠亡堀で
お弓が深みにはまって死んだ
伊右衛門が釣りをやっていた
しかし事件を語る人はいない

人でにぎわう浅草寺の境内を四人の集団がやってくる。伊藤喜兵衛、その娘お弓、お弓の子どもお梅、乳母お槇、医者尾扇である。伊藤喜兵衛は楽しくてたまらないという素振りで、機嫌の悪い観客に話しかける。

喜兵衛 私たちは四谷左門町から二時間かけてやっと浅草寺に着いたんです。楽しいでしょう。見てご覧なさい。おもしろいものがいっぱいある。見世物小屋がある。食べ物屋がずっと並んでいる。ああ、おいしそうな匂だ。お腹がぐうぐう泣いているわ。おうおう、あそこにはおみやげ屋が軒を連ねている。最新流行の鏡、櫛、紅、白粉、鬢付け油、帯留め、かんざし、財布、香袋、お扇子、下駄、草履、鞠、羽子板、歌留多、笛、太鼓、三味線、ビードロ、役者絵などなんでもあるのだ。浅草寺の境内は江戸で一二を争う名所なんだよ。

これ、お梅や、楽しいだろう。いや、きっと楽しくなるはずだよ。お梅や、何がほしい。さあ、おみやげ屋へ寄ろうか。寄りたくないって。じゃ、お腹が空いているんだらう。きっとそうだよ。鰻を食べよう。それとも寿司か、そばか、川魚料理か、あんみつか、うどんか。何がいいんだ。さあさあ、お梅、言ってごらん。

乳母お槇 旦那様、ちょっとお待ち下さい。若いお嬢さんに、食べ物を無理に勧めても気が晴れるものではありません。ねえ、お嬢様。芝居小屋へ入りましょう。今をときめく団十郎や菊五郎を見て涙を流しましょう。すぐその小屋では、歌右衛門がお半長右衛門をやっています。あの道行きはきっと泣かしてくれます。こんな芝居よりずっとおもしろい筈よ。二人で泣いて浮き世の憂さを忘れましょう。

喜兵衛 これこれ、お槇、色恋の話は禁句じゃ。お梅や、何をしたい。遠慮入らぬぞ、さあ、申して見よ。そうじゃ、隅田川で船遊びをしようか。芸者衆を集めて賑やかな音楽を流しながら、川を下るのだ。それとも遊技をして遊ぼうか。うん、遊技が一番じゃ。さあ、行こう。弓でお人形を射落とすのじゃ。

医者尾扇 それがいい。さあ、さあ、射的屋へ行きましょう。旦那様、三軒先に評判の美女がおりまして、きっとお気に入りですよ。さあ、行きましょう。何をぐずぐずしているんですか。

喜兵衛 そんな美女か、どれどれ。いやいや、今度にしよう。

乳母お槇 これ尾扇どの、いい加減になさい。旦那様、ご覧なさい。お梅さんばかりか、お客さんのご機嫌も前より悪くなっていらっしゃるじゃございませんか。心に悩みをお持ちのお嬢様にそう矢継ぎ早にああしよう、こうしようと話しかけても心は晴れません。話を聞いて上げることです。じっくり聞いてどこの、どなたにご執心なのか、もつれた糸を解きほぐして上げることです。

喜兵衛 やっぱりお梅の病は恋の病だと申すのか。

乳母お槇 ほんとお侍さんは野暮なんだから。お梅さんを見てご覧なさい。体全部で恋しい恋しいと信号を発しているじゃございませんか。ため息といい、体の動かし方といい、重心が下から上へ、上から下へと移動して、しか

も螺旋状にうねっている。あれぞまさしく恋煩いの身体表現です。

お弓 まだまだ子どもとっていたに、お梅が恋をする年になるとは。

乳母お槇 今のお子さんは早熟なんです。私たちの頃はみんなうぶでしたし、今ほど男女のことは開放されていなかったでしょう。浄瑠璃だって清元だって、昔と違って男女の仲を恥ずかしいほどあからさまに唄うでしょう。家庭の中には、心中ものや不義密通ものが反乱しているでしょう。これじゃ子どもがどんどん大人になってしまいます。

喜兵衛 しからばお槇、いかがしたらよろしかろう。

乳母お槇 ここは私にお任せ下さい。きっとお嬢様の胸の内を聞き出してご覧に入れますゆえ、みなさんは向こうの茶屋でしばらくお休み下さい。

皆々 お槇さん、きっと頼みましたよ。宜しく願いしましたよ。

ト、言いながら上手に去る。お梅はみんなが去るまでうぶな少女の役を演じていたが、お槇が戻ってくると、とたんに現代のわがままな少女に変身する。

お梅 ねえ、早く伊右衛門さんと一緒になりたい。お願い、一緒にさせてよ。お槇と一緒にさせてやるって約束したじゃない。

乳母お槇 お嬢さん、声が高いですよ。はいはい、確かに約束しました。

お梅 じゃ、一緒にさせてよ。あたし、あの人と一緒になれなかったら、死んでやるから。

乳母お槇 そんな風に脅かすものではありません。一緒にさせてあげたくても、伊右衛門様には妻も子どももいらっしゃる。だからどうしたらよいか、いろいろ作戦を練っているのですよ。もう少しお待ちなさって下さいませ。

お梅 もう少し、もう少し待てって、一体いつまで待てばいいのよ。大人って汚いのよ。あたしがそのうち諦めるとでも思っているんでしょう。あたし、絶対諦めませんからね。

乳母お槇 約束は必ず守りますから、これまで通り、恋の病にかかった芝居を続けて下さい。今夜こそ、お嬢様が伊右衛門様と一緒にになりたいという希望を旦那様にお話しして、ご許可をいただきますから。きっと旦那様もお梅様の願いなら、聞き入れて下さいますよ。

お梅 だから、どうしておじいちゃんに話さなければならないの。あたし、最初から結婚などしなくたっていいのよ。二人が交際できればそれでいいのよ。そのために乳母があたしと伊右衛門様二人が会う口実と場所さえ都合つけてくれば、それでいいの。妻子のある伊右衛門様ですもの毎日お会いしたいと言いません。月に数回お会いできればお梅は満足するわよ。あた

し伊右衛門様にきつと結婚しようって言わせる自信があるの。彼が結婚しようって言った場合は、向こうに責任があるわよね。そしたらあたし、言ってやる。奥さんと別れてくれるなら、結婚するかもしれない。いつまでも待つわけには行かないから、早く身をきれいにして、改めて求婚してちょうだい。刺激的ゾクゾクするわ。

乳母お槇 恐ろしいことを、お嬢さん。お嬢さんたち若い人の考えること、あたしたちには理解できません。

お梅 ああ、いらいらする。今週中に伊右衛門さんとデートさせてよ。いいでしょ、いいでしょ、ねえ、いいでしょ。

乳母お槇 それにしてもお嬢さんは十四、伊右衛門様は三十三。あたしが伊右衛門様に惚れたというなら、世間様も納得しようが、十四のお嬢様が……

お梅 お槇さん、横取りしたら許しませんよ。伊右衛門様はお梅のものなんですから。

乳母お槇 大丈夫ですよ、誰が猫のような真似をするもんですか。お嬢さん、お嬢さんはどうして伊右衛門様が好きになられたのですか。伊右衛門様は暗くて、汚れて、悪意をうちに秘めた闇の帝王みたいだ、と町中の女房どもが言っています。

お梅 そうよ、その通りよ。彼は孤独なのよ。

乳母お槇 その怖ろしさが、時にはたまらない魅力に見えてくるって。あたしの主人もそういうところがあった。そんな男にどうしてお嬢様のような若い娘が惚れるんだらう。

お梅 伊右衛門様は孤独なのよ。彼は何かを怒っているのよ。闘っているのよ。安定感のないところが魅力のすべてなのよ。あなた方大人に説明したって分かってもらえっこないからやめる。今週中にきつとデートさせてちょうだい。約束をすつぽかしたら、あれをばらしてやるからね。

乳母お槇 あれって、何のことです。

お梅 すつとぼけちゃって。

乳母お槇 とぼけてなんていません。何のことです、教えて下さい、お嬢様。

お梅 行水。

乳母お槇 行水。

お梅 お槇さんが行水をすると、おじいちゃんがお手洗いの小窓から覗いているのを知っているでしょう。あなたはおじいちゃんが障子をそろそろと開けるのを待って、わざと体をそちらに向け、片膝を立てて水を使うでしょう。

それだけじゃないわ。あなたと母上は、いい年した女二人が三丁目の料理屋にかつては売れたが、今では落ち目の女形が食事に来るのを知って通ううち、いつしか交際を始めるように……

乳母お槇 今時のガキはそこまで知って強請るのかい。

お梅 お榎さん、あたいのために力になってくれるわね。

乳母お榎 そこまで知られちゃ、断れないでしょう。占い、祈祷、南蛮渡来の薬の力、それで足りなきゃ神がけしてでも、きっと望みを果たして上げますよ。

お梅 ありがとう。お榎さん、あたいは恋煩いの振りをするから、おじいちゃんと母上を呼んできてもいいわ。

舞台が明転する。

今後も、舞台はできる限り明るい中で転換する演出を考えてほしい。

第二場「按摩宅悦住居」

伊右衛門の忠実な部下であり、彼の父親のような役目を背負った宅悦は、庶民の活力ある文化圏に生きている。

その文化は大人の、大衆的な、裸の、粗野なものであるが、どこかに憂いと陰り、抑制と恥じらいを秘めている。宅悦は粗悪な女でささやかな庶民的娯楽を提供する。宅悦たちの文化は悠久であり、慎ましやかである。

「宅悦のコマソンは言い訳ソング」

ハイハイ、このくらいがよくききます
ホントの灸はすえやしません
マアママおもてむき人氣が悪うございますから
それで灸をほぐしております

そう大勢で一人のおなごを目がけてはなりません
こりゃこういたしましょう
あなた方は大と小のお望み
後からお出でなされた方はご指名さん
恨みっこないように籤とりがようござりますて。

お上の目を避け、（警察の目を避け）闇営業
おもては灸の(表はお風呂の)健全治療
そこでさおもての看板に
闇魔様が灸をすえているのサ

このシーンには相手役が登場しない。宅悦は、お大とお小の一人二役を演ずるお大と、文嘉と、彦兵の四役を演じる。おそらく基本となる宅悦の原形を残し、宅悦が演じ分けていく四人の人物が闊達・簡明に演じられればよい。ここでは写実的な演技様式

は求められない。声、身振り、仕種などの外的な様式性と線の太い内的行動によってもたらされる性格の描写が大切となろう。

宅悦 (文嘉、彦兵、直助を相手に)サアサア皆さん籤をひいて、開けてご覧じませ。文嘉さんにはお大。こりゃあなたのお望み通りだ。彦兵さんはお小。それから直助さんはバイトの店員。こう詠えたように決まることもないものだ。そうせかせかせしないで、待つのもしばし、ちっと横におなりなされ。

ト宅悦、小さな衝立を真ん中に置き、布団を二つ敷き、屏風をたて、行灯を暗くする。宅悦はお大を招き囁く。実際にはお大は登場しない。お大が実在しているかのごとく語る。

こりゃお大さん、こちらはお大をご所望、あちらはお小をご所望。いつものように神業の一人二役、荒く稼いでくだされや。年のいったお客様、ご用が済んだらすぐにお帰りなさるだろう。もしぐずぐずねばる様子なら、愠気の女房と腹をすかした子どもの話を切りだし、片時も早く追い出すのじゃ。よいな、よいな。

ト言って、彼は後ろを向いてマスクを掛ける。ここで宅悦を演ずる俳優はお大を演ずる。お大になって文嘉の床に近づく。

お大 モシ、お休みなされやしたかえ。アイ、わたしが年は、とって十歳。若すぎるとおっしゃるなら、ホントの年は十六歳。名前はおさと、生まれは越後。母が永の患いで、父はしががない水飲み百姓、あたいの下に八人の弟妹。一番下の妹は一歳と三月の嬰兒ゆえ、あたしがこうして苦界に身を沈めました。どうぞ健気な十六歳と思し召し、たんと可愛がって下さいまし。オオ嬉し。(ト文嘉にすがりつく)

一瞬後、文嘉の床から起き出る。別のマスクを懐中から取り出してかける。今度のマスクは老婆の顔

をしている。足下がおぼつかない。急いで彦兵のところへ行く。

お大 ヤットコシヨ。もうお休みかえ。アイ、年が寄ると、歩くのに大儀だからね。ようよう杖にすがって、今ここまで。アイアイ、あたしの年は七十九歳サ。あんまり年増すぎると見下すもんでねエ。これでも二人や三人ぐらいの客は何ともないよ。お前が大年増がいいというからわしが来た。このくらいの年増はもう滅多にござりません。頭は黒いようなれど、残らず白髪サ。みなさんがよくご存じじゃ。後ほどゆっくりとご覧なされ、ヒヒフフフホホ。サアサア布団に入れてくださされ。年寄りに夜風はこたえますだ。

文嘉が呼んでいるようだ。お大は、彦兵の布団からはいずり出て、衝立をまわって文嘉の枕元に飛び込む。

お大 アイアイ、今手水に行ったたのでござります。長いとおっしゃいまして、年端のいかない子どもだから、下湯を使ってきたのサ。

彦兵がお大を呼んでいるようだ。

お大 ハイハイ、いま参ります。ヨッコラシヨと。お待たせ。手水に行ったのだわな。どうも年がよると我慢がなりませんよ。

文嘉が呼ぶ。

お大 はいはい、いま参ります。いま手水に行って来ました。またかと言われても、年が寄ると手水がちかいのさ。イヤ違った、年が若いと手水が近いのサ。

彦兵が呼ぶ。

お大 アイアイ。いま参ります。今、下湯を使いに行ったのサ。ババアのくせに下湯かと。ホイ、コリヤ、しくじった。

文嘉が呼ぶ。行きかける。ト彦兵が呼ぶ。ついにお大は立ち往生する。

お大 アイアイ文嘉さん。いま参り……。アイアイ彦兵さん、ただいま。(右往左往し)アイアイ、文嘉さん、彦兵さん、文嘉彦兵さん、エエ面倒くさい、二人まとめて文彦さん。

トド、お大はベッタリと座り込む。

お大 こうなったからにや、逃げも隠れもいたしません。これがお大で、これがお小。ちょっとした商売用のからくりさ。眉毛が半分、頭が島田で、顔が年増、あえて謙遜して申すなら、面は猿に似て、啼く声豚に似たり、丹波の山から生け捕った世にも稀なる珍獣とはこのお大さんのことなのさ。

サア、帰るなら勤めを置いて行かっしゃい。ついさっきまで屏風の内では気を入れて、二人ながら二度までも遊んおきながら、食い逃げするとはあつかましい。勤めがなければ返すことはならぬぞえ。サアサア勤めをおくれ、勤めをおくれ。こんな面でも、あんな面でも、初手から承知の上であろう。銭をおかねえが最後、これから蛇の執念で江戸の市中を追い回し、わめき立てるが覚悟はいいか。

ここで文嘉と彦兵があきらめて銭を払う。お大は手を出してそれを受け取る。彼女は銭を懐中に納めて微笑む。後ろを向く。

ト、伊右衛門が怒り狂って登場する。彼は右手に張りかけの傘、左手に糊はけをもち、たすきを掛けた傘張りの格好をしている。

伊右衛門 居るか。居ないのか。居るか。こりや、地獄屋、按摩、地獄屋、口入れや。

宅悦 マア、騒々しい。この通り居りますとも。

伊右衛門 あいつを捜し出し、首に縄つけて引きずってこい。サア、行け、トットと行きやがれ。

宅悦 そうせかされても、いっこう用向きが知れません。まあ、落ち着きなさって、わけをお話下さいませ。(伊右衛門がむくれているのを見て取っ

て、大声で叱りつける)こりゃ、伊右衛門、六つ七つの子供じゃあるまい。がんぜないとはそなたのこと。ちったあ大人になんなせえ。そこへ座って、両手を膝に置いて。さあ、話してごらんなされ。

伊右衛門は宅悦の指示におとなしく従う。

伊右衛門 では、落ち着いてお話申そう。

宅悦 では、お伺いいたそう。

伊右衛門 このように賃仕事をいたしておるも、こりゃ浪人暮らしの、こりゃ慰みと申すものじゃ。御主人が榮えていらるれば、塩冶の家中、民谷伊右衛門、キットいたした侍じゃ。

宅悦 作用でござります。して、あわただしき用向きとは。

伊右衛門 この民谷家に先祖より、持ち伝えたるソウキセイと申す中国より伝来の薬。こりゃ、外には少ない薬種、腰膝抜けたる難病にもたちまち眼前に不思議をあらわす希代の妙薬。浪人の身の不自由ながら、他の人の手にさえ渡さぬ品。それを盗んで、あの小平めが駆け落ちひろぎ……

宅悦 ヤアヤアヤア、按摩取りのわしが口入れて、雇いに抱えた小平が駆け落ち。折悪いお内儀の初産が、血が治まらないで後のご病気。その中での小平の駆け落ち。コリヤ、まことにわしが旦那に言い訳がござらぬ。こりゃ、一大事じゃ。それをなぜ、ご挨拶抜きでお話なさらぬ。さあ、片時も早く追っ手をしむけにや。伊右衛門、ござれ。

ト宅悦が駆け出すので、伊右衛門も後を追う。

アップテンポな音楽となる。つけのバタバタバタが入る。

「三つの殺人予告」

四谷左門町、伊右衛門の家で
お岩がお梅に取り付くだろう
伊右衛門がお梅の首を切り落とすだろう

四谷左門町、伊右衛門の家で
小平が喜兵衛に取り付くだろう
伊右衛門は喜兵衛の首を切り落とすだろう

夏の砂川隠亡掘りで
藻にくるまれたお岩と小平が
戸板の褥や裏表
なつかしや伊右衛門様と
濡れた手をさしだした

コーラスと一緒に走る。二人は走りながら台詞を言う。

宅悦 (傍らのコーラスに向かって) コリヤ、親父どの、倅小平の悪事はそなたの監督不行届が原因じゃ。貴様は、なんと思わっしゃる。

コーラス イヤモウ、何と申してようござりましょうやら。

伊右衛門 (コーラスに向かって) コレ親父、いま申したソウキセイは、わずかな物と思うが、世間に稀なる代物ゆえ、薬種問屋へ持っていっても、十両や二十両には直なるワ。先祖よりの添え書き、お医者方の鑑定もある、相違ない代物だ。しかしそれほど願うなら、そちに免じて、一両日の日延べはいたしてくりょう。行方知れねば、薬種の代わり、代金を持参いたして、その上に済ましてくりょうぞ。さよう心得、帰れ帰れ。

コーラス ハイハイ、それはありがとうございます。

宅悦は最前より走りながら、団扇をあおいでいる。

伊右衛門 そちは何をしておる。

宅悦 ごらんの通り、薬を暖めておりまする。

伊右衛門 お岩の薬か、生まれた子供の薬か。

宅悦 お岩様のでござりまする。あの子はグツともおっしゃらぬ。鷹揚なお子さまだ。その上、お前様によく似て、争われぬものでござりまする。

二人はいつしか四谷の浪宅に到着している。

伊右衛門 このなけなしのその中へ、餓鬼まで産むとは気のきかねえ。これだから素人を女房に持つと、こんな時には亭主の難儀だ。

ナニ隣家の伊藤喜兵衛どのからの使いとな。サアサアこちらへ、入いりゃ

れ、入いりやれ。まことに近所にあつて、ご疎遠つかまつります。ご主人様にもお変わりはないかな。お岩が無事男児を出産せしをお聞き及びになられて、わざわざご丁重なご挨拶。いつもながらのご丁寧に、まことに痛み入ります。結構なご酒とお煮染めは夜伽に頂戴つかまつります。宜しく申して下さい。

宅悦 　ただ今、伊藤家から頂いた一品の粉薬、血の道の妙薬とのこと。お岩様に差し上げてくれとお志。かたじけのう存じます。ならばさっそく白湯と薬をお持ちして。

この時、赤子泣く。

伊右衛門 　よく泣く餓鬼だ。蚤でもくうのか。

ト障子を開ける。このうちに木綿布団を敷き、お岩、産後の体、赤子を抱きいぶりつけている。

伊右衛門 　今日は心よいか、どうか。

お岩 　ありがとうございます。産後と申し、この間の不順なようき。そのせいかして、一倍気持ちか。それはさておき、伊藤様から重ね重ねのお心使い。また先ほどはこのような赤子のために結構な小袖までいただき、ただただ恐縮しております。伊右衛門、お前、礼に行ってください。

伊右衛門 　しかしこの形では。

お岩 　モシ宅悦さん、奥の箆筒の抽斗に、旦那さんのお羽織がござんす。どうぞ取っ手来ててください。

宅悦 　ハイハイ、かしこまりました。

伊右衛門 　なに、羽織が家にある。

宅悦、羽織をもって来る。

お岩 　サア、お羽織をお召しなされませ。何もかも揃うてござります。

伊右衛門 　いつの間にか羽織はとっておいたか、かたじけない、かたじけない。それでは伊藤家へご挨拶にうかがいましょう。

お岩 　モシお前、早う戻って下さりませ。

時の鐘がなる。伊右衛門が退場する。お岩は夫を見送って、さめざめと泣く。

お岩 常から邪険な伊右衛門どの、男の子を産んだというて、さして喜ぶ様子も無い。何ぞというどと穀つぶし、足手まといな餓鬼産んでと、朝夕にあの悪口、それを耳にもかければこそ、針の筵のこの家に。ひよんな男に添いとげて、辛抱するも父さんの、敵をうってもらいたさ。(櫛が落ちる。それを手に取って)こりゃ、コレ、母様のお形見のこの差し櫛。物好きなされし梅重ね。棟に工夫の銀細工。身貧な中でも離さぬ、どうで産後のこの病気、とても命も危うゆえ、わしが死んだら妹に、せめて形見と贈るのは、母の譲りのこの差し櫛。これよりほかに、この身についた……

この時、赤子頻りに泣くゆえ、いぶりつけいぶりつけ、寝床を離れよきところへ来たり、ヨロヨロとして。

アア、また目眩がする。血の道のせいであろう。マア、親同様にお優しい伊藤様からいただいたこのお薬を飲んで。

お岩は粉薬を茶碗にあけ、土瓶の白湯を注ぐ。押し頂いて飲む。

これでちっとは心持ちも直ろう。ドリャ、大事の赤子を。

ト赤子を抱こうとすると、にわかに病気が起こりし体にて、苦痛の思い入れ。

ヤヤ、今の薬を飲むと頻りに、常より気持ち。ヤ、こりゃ顔が熱気して、一倍気合が。アア、苦しや苦しや。アイタタタタ。

宅悦、奥から出てきて。

宅悦 これはしたり。どうなされたどうなされた。顔色が変わって、どう

やら様子が。

お岩 今お隣りから貰うた薬を飲むとそのまま。アア、苦しや苦しや。

宅悦 ナニ、粉薬をあがって苦しいとは、薬違いではござらぬか。マアマア、風にあたっては悪い。ササ、こちらへござって。

ト手を引いて床に寝かす。お岩苦しむ。宅悦、いろいろ介抱する。

お岩 (虫の息のもとで)伊右衛門、伊右衛門、こちらの人。お会いしたい、そばにいて下され、お助け下され、手を握っていて下され。お願いです、お岩を抱きしめていてください。伊右衛門。

宅悦 お岩さん、じっとしていなされ。泣いてもわめいても、性悪な伊右衛門はしばらくは戻ってきはしない。

お岩 いえ、いえ。あの方は粗野な仕打ちはなさるけど、心の底は優しい方、お岩が苦しみ知ったなら、きっと戻って介抱して下さるはず。伊右衛門、伊右衛門、お戻り下され。

宅悦 これ、お岩さん。何も知らずに死ぬのは、あんまりにも不憫というもの。どうせ長い命であるわけじゃなし、ほんとのことを知った上、成仏しておくんなせえ。

お岩 伊右衛門どの、伊右衛門どの。

宅悦 おれがこんなに、お岩さん、お前さんの面倒を見てさしあげるのも、あの馬鹿者の伊右衛門がことによったらわが子かと思うふしがあるからさ。確かな証拠はないけれど、あいつの心の悪さの一切が、なにからなまでにこの俺の若いときに生き写し。俺には昔、男の子がいたが、たった六月で生き別れ。それもあつしが別の女を追いかけて、女房子どもを捨てたため。今更確かめてみても詮無いこと。

今を去ること三年前、伊右衛門に出会った時、ことによったら伊右衛門は昔俺が捨てた子かと、ふと思いこんだが不思議な縁。ただあつしが息子と信じ込み、あいつを助けて生きようと心に決めて、悪の手先や相談役、諫める役やなぶられる役、みんな兼ねて便利屋宅悦。どっぷり浸かった親父三昧。

お岩 伊右衛門どの、こちらの人。

宅悦 お岩さん、さ、さ、耳をかつぽじってよーくお聞きなせえ。不憫ながらお岩さん、お前さんは毒を盛られたんだ。俺じゃねえ。伊右衛門でもね。これには外に作者がござる。何を隠そう隣家の喜兵衛様。嘘じゃねえ。

孫のお梅が伊右衛門様に恋煩い。伊右衛門様を孫の婿にもraitたいにも女房持ち。さすがに向こうは金持ちでも、ちっとはお前に義理もあり、考えあぐねたその末に、素人なるが故の大胆不敵、あつと驚く残忍さ。血の道の薬

と偽って、お前に飲ませて顔を変え、伊右衛門がお前に愛想を尽かすのを待って、お梅と一緒にしてやろうと、お抱え医者尾扇を抱き込み、喜兵衛と乳母お慎が三人がかりで考えたとんでもねえ荒計略。そうとは知らずにうかうかと、飲んでしまったお岩さん、はてさて気の毒千万。すべてをばらした、その上はどうか成仏してください。

お岩 そうとは知らず、かたじけないと思うから、この身を蝕む毒薬に両手をつけて感謝の一礼、今に思えば恥ずかしい。さぞや笑わん、口惜しいわいの、ええい、口惜しいわいの。息あるうちに喜兵衛へ、この礼言わいでおくべきか。

トよろめきつつ門口へ行こうとする。お岩は自分の姿に気づき、また鏡をとって。

お岩 髪もおどろなこの姿。せめて女の身だしなみ、お歯黒つけて、髪も梳き上げ、喜兵衛親子にことばの礼を。コレ、お歯黒の道具を、揃えてここへ。

宅悦 ヤヤ、産婦のお前がお歯黒つけては。

お岩 (いらだって) エエ、持たぬかいのう。

スクリーンが降りてくる。

ここから、おどろおどろの「髪すき」の演技がスクリーン上に投影される。次の「さむらいの歌」が終わると、いつもの独吟が背後に流れる。結婚式の背景は髪梳きの背景となる。

スクリーン上のお岩の映像は約二倍の大きさに投影される。目の前で進行中の結婚式と、同時刻に別の空間で不気味な「髪梳き」が進行していることを観客は理解する。目の前の事件より、背後の映像に関心が集まるものの、映像によって惹起される恐怖感や同情といった情緒は前の事件によって妨害される。そして観客のフラストレーションが最大に膨張することになる。

「さむらいの歌」

コーラスが登場する。男声一名に女声一名の構成であるが、二人はそれぞれ三名のパネル製のグループを率いているので、合計八名に見える。パネルのコーラスは一緒に手を広げたり、足踏みしたりできる。

武士は掟にしばられる
武士は主人のために死ぬ
いくさがなければ給料が下がる
平和続きじゃ仕事がない
気がついたら鎧が重すぎた

さむらいはいつも正義で不器用で
傘をはったり、用心棒
その日暮らしのキリギリス
冬になったら雪だるま
だけどさむらいを止められない

武士は義理に縛られる
武士はけんかのために死ぬ
いくさがなくて給与は遅配
平和続きで飯食えない
鎧はいつしか質ながれ

さむらいはいつも正義で知恵がなく
傘をはったり、人をおどしたり
その日暮らしのキリギリス
冬になったらおもらいだ
だけどさむらいを止められない

歌の間に金屏風が一双おかれる。

宅悦　　さーて、今日おいでのいづれもさまに、一言ご案内申し上げます。
今日ただいまより、民谷伊右衛門どのと高家の家臣・伊藤喜兵衛どこの孫娘
お梅どこの婚儀が整い、ここに華燭の宴を執り行うことにあいなりました。

いささか複雑な事情も多々あれど、このような婚儀はいささか変則的かつ革新的であります。そこは曖昧に、厳しく詮索なさらぬようお願い申し上げます。

さて、御来賓の皆様には花嫁、花婿、および親族・友人一同をご紹介申し上げます。

花婿・民谷伊右衛門どのでございます。その隣りは花嫁・伊藤喜兵衛孫娘・お梅どのです。民谷家は不幸にも父親近藤源四郎どのが伊右衛門幼少のみぎりに他界なされ、その後は母お熊どのでの手に大事に育てられました。本日はあいにくお熊どのは御主人高師直様の命を受け、お孫様のご養育係として京に上っておりますれば、欠席させていただく失礼をお許し願います。

さて、親族になり代わりまして陪席いたしますのは、民谷が同輩・秋山長兵衛です。同じく関口官蔵です。隣りに控えしは仲間伴助です。

上手の席にお控えなさるは、高師直の御家老、伊藤喜兵衛にござります。そのお隣りが伊藤喜兵衛の令嬢・お弓様です。お次は、同家乳母・お槇様。お次は主治医、尾扇どのでござります。

それでは、お仲人の役をお務め頂きました関口官蔵どのよりご挨拶を頂戴いたします。

太鼓が鳴り渡る。あてやかな三味線音楽が後に続く。

関口官蔵の祝辞のメモが投影される。「一つ、伊右衛門は塩冶の浪人であるが、崇高な武士の魂の持ち主である。一つ、伊右衛門は深い愛情の持ち主である。」

宅悦が演ずる四谷左門と伊右衛門が出会う。左門は浪人の形、手に編み笠を持っている。

伊右衛門 アイヤ、左門ど、お待ちなされい。しつこく申すようござるが、お岩どのが身籠もってまでいる仕儀でござるゆえ、お岩をこちらへおかえしなされて下されい。

ト左門、知らぬ顔して行きかける。

伊右衛門 待たっしゃい。一言のご返答もなく、無礼でござらうぞ。

左門 無礼ということ、よく知っていらっしゃるな。もっとも娘お岩もお

岩、不所存にてころび合い、親許さぬ夫婦仲。畢竟、正式の仲人もなき、男と女の睦み合い。そりゃ、この道ばかりは、別なものと、そのままに捨て置いたが、はっきり言うと、婿のそなたの根性が、おれの気に入らぬ。親が気に入らぬ婿ゆえ、取り返したあのお岩。幾度言ってもご返答は、ならぬというよりほかはない。それゆえ無駄にものは申さぬ。こなたも若者らしくない。女はお岩一人ではあるまい。しつこく言わずと、思い切ったがよいわサ。

伊右衛門 すりゃ、どのように申しても。

左門 君主に二言なしサ。

伊右衛門 ハハハ・・・、君主は罪を憎んでもその人を憎まず。さては、浪人に落ちぶれた四谷左門、貧乏生活に耐えかねて、娘を引き上げ、遊女はした女にでも売るつもりか。いや、そのつもりに相違あるまい。

左門 ハハハ・・・。口は重宝なもの。大事な娘を添わせておいたなら、おのれこそお岩を夜鷹に売り放つつもりであろうがな。年寄り悪いことは言わぬほどに、諦めてしまわっしやれ。

伊右衛門 イヤ諦めぬ。いったん武士が言い出したこと、刀にかけても。

左門 刀にかけて、どうおっしゃる。

伊右衛門 あくまで身共をさみする老いぼれ。女房お岩の縁につながりゃこそ舅あしらいもモウこれまで。お岩を返さぬ上からは、他人の四谷左門、討ち果たすのが武士の意地。その舌の根を。

ト白刃を抜いて切りかかる。四谷左門、最初は互角に渡り合うが、とど腰を蹴られて前に突っ伏す。
伊右衛門、すかさず左門を切り殺す。

伊右衛門 強情ぬかした老いぼれめ。刀の錆は自業自得。ハテ、いい態だわえ。

宅悦は、左門から宅悦にすばやくトランスフォームする。

宅悦 (間を置かずに)ありがとうございます。ひきつずき、来賓のご祝辞を頂戴します。まず婿の刎頸の友である秋山長兵衛どのにお願い申しあげます。(同じく間髪を入れず)ありがとうございます。引き続いて御医尾扇どにお言葉を頂戴いたします。ありがとうございます。それではしばらくご歓談ください。

それでは高師直どの家中、伊藤喜兵衛どどの同僚、小林平内どどのに謡をお願い申し上げます。(ここも間を置かずに) ありがとうございます。

これをもちまして、祝言の儀を終了させていただきます。ありがとうございます。

金屏風が取り払われる。真っ赤な布団が敷かれています。枕元に二枚折りの屏風と行燈がある。

ナレーター役になった宅悦が前に進み出る。

宅悦 さて、一同が散会する。後に伊右衛門と伊藤嘉兵衛、孫娘・お梅、乳母・お楨の四人だけが残された。行燈の明かりが夜風に揺らいで、四者四様の想いが交錯する。さて、お客様方、これから私は伊藤喜兵衛の役を演じます。

宅悦の喜兵衛 時に伊右衛門どどの、いよいよ貴公の申されし通り、お岩には。

伊右衛門 先刻内祝言の砌、お話し申した男と違い、小者の小平という者と、またぞろの不義間男、事現れしと存じつき、産後の女を同道いたし、この如く乳飲子を捨ておき、家出いたせし憎つき両人、さすればすぐにお梅、今晚よりして泊めます。舅御にも、さようご承知下されい。

宅悦の喜兵衛 左様でござったか。されど、新床に赤子の添え寝は無粋なもの。そうじゃ、身共も今晚、留守居がてらに泊まって進ぜる。明日は早々、乳母を訪ねるぶんのこと。楨よ、勝手よきところへ、おれが床をとってくれい。して、婿どのと孫めのお梅が寝間はな。

伊右衛門 只今までお岩が罷りあった床が、彼奴への面当て、やはりあれへ臥せりましょう。

宅悦の喜兵衛 なるほど、それもようござろう。コリヤ、梅よ、これはそちが守りじゃほどに、大事にこれを首にかけていようぞ。よいな、よいな……

伊右衛門 (お梅が躊躇するのを見て、イライラして語気荒く)ハテ、お梅どの、大事無い。身がよいと申すに誰が何と申すものじゃ。

宅悦の喜兵衛 そうじゃそうじゃ。さて、今宵は身共が乳の無い乳母、寝させて進じよう。

伊右衛門 しからば舅御、何分よろしく。

ト宅悦の喜兵衛が腕の中の赤子に子守り歌を歌って聞かせる。時の鐘。真ん中に伊右衛門は一人立ち、思入れ。

伊右衛門 ハテ、物事も、これほどまでに巧くゆくか。さてこれからは新枕。
娘の手入らず。ドリャ、水揚げにかかろうか。

ト凄き合方、時の鐘になり、一間の屏風を開け。

伊右衛門 お梅どの、さぞ待ち遠で。

お梅 ねえ、あたしきれい。愛してる。

伊右衛門 (たじたじとして)そりゃ、き、きれいだとも。

お梅 さあ、抱いてちょうだい。

伊右衛門 か、かたじけない。

お梅 ウフフフ。まあ、あなた、振るえているじゃない。

伊右衛門 お梅どの。

ト伊右衛門がお梅にむしゃぶりつく。この時、凄
き音楽一段と強まり、後ろの障子いっぱいにお岩の
顔が映し出される。

お岩 アイ、こちらの人、わが夫、かならずともに末長う。

伊右衛門、ぞつとして、傍なる刀を取り、抜打ち
に障子の絵を一直線に切る。返す刀でお梅を切る。
障子の絵はたちまち消えて、もとの状態に戻る。

伊右衛門 ヤヤヤヤ・・・お岩と思いのほか、やっぱりお梅だ。こりゃ早まっ
て。

トうろたえて、刀を提げたまま下手の喜兵衛を起
こそうと屏風をあける。

伊右衛門 コレ舅どの舅どの、珍事がござる、アノ間違つて。

ト喜兵衛を揺り起こす。物凄い音楽が再び強ま

る。ト正面の障子に小平が浮かび上がる。「旦那様、薬を下され」と書いた字幕が出る。伊右衛門は字幕を読んで。

伊右衛門 なに、「旦那様、薬を下され。」だと。わりや、小平め。

ト言いざま、また抜打ちに障子と喜兵衛を切りかかる。ト障子の絵が消え失せる。

伊右衛門 ヤヤヤヤ・・・、切ったる首はやっぱり舅。さては死霊の仕業よな。ハテ執念の。

(突然、混乱に陥る) 宅悦、宅悦、どこへ行った、宅悦。手を貸してくれ。破滅だ、花火が次々に暴発している。止まらないんだ。音の洪水だ。花火が、花火が。

第三場「蛇山庵室の場」

大詰めの口上ぶれがすむと、舞台の上から「父の愛」「待つ」「使者」「虐げられしもの」という文字が降りてくる。上演中、ずっとかかっている。
雪が降っている。

伊右衛門 ドリヤ、灯かりをつけましょうか。(外を見て)アア、積もったわ。真っ白になったな。思い起こせば、蝉が鳴き、蚊に追われた夏の日の、下草の香りや葉の色に、心惑わされて悪行を重ねたが、それもひとえに、それもひとえに……今更、嘆いてみてもはじまるまい。

(苦しげに咳き込む)畜生め、こんな病に負けてたまるものか。(祈祷のための百万遍が聞こえてくる)この俺の病のために、祈祷をしてくれ町内の人たちの気持ちはありがたいが、俺は神にも仏にもすがらつもりはこれっぽちもない。こんな俺を先方様でも断るだろう。俺を救えるのは俺しかいないんだ。俺を裁くのは俺しかいないのだ。残念なことに、今の俺には、救う力も、裁く力も不足している。

お岩にはすまないことをした。左門にはすまないことをした。喜兵衛にもすまないことをした。お梅、お弓、お榎、お袖にもすまないことをした。小平、お前にもすまないことをした。たった一夏の白日夢のような出来事だ。

隣の部屋で行われている、善意にあふれた遊技のような百万遍を聞きながら、俺はひたすら待っている、己を救う力と裁く力が蘇ってくるのを待っている。真夏の力はどこへ行ってしまったのだろう。あの時は生きる力が充満していた。土手の夏草が縦横無尽に繁っていた。ドロと水草の今にも爆発しそうな匂いが風のない土手一面をおおっていた。あの風景の中では、生きるものも、死んだものも一緒だった。生も死も渾然としていた。だから俺は叫ぶことができた。死ぬも生きるも一緒だと。

「首の歌」

首が飛んでも、動いてみせらあ
おお、生きていたい
聞いてくれ 助けを求めるこの声を

だれかいるか、だれかいるか
そこの暗闇に
伊右衛門が迷い込んだのは寄らば大樹の陰ではない
ここは地下の暗闇にちがいない
この世を支配する力
俺たち、虐げられし小物どもを支配する
魔の力が俺をここに閉じこめたのだ。
冷たい、ドロの壁が俺を閉じこめている

首が飛んでも、動いてみせらあ
俺を救ってくれる人はいないのか
俺を裁いてくれる人はいないのか
生きていたい
もっと苦しんでも生きていたい

伊右衛門 俺は許されるだろうか。

宅悦 どうして俺に分かる。

伊右衛門 俺は生きていたい。

宅悦 そうとも。俺だって生きていたい。

伊右衛門 どうしてあんなことをしたんだろう。

宅悦 俺だって不思議に思ってた。

伊右衛門 お岩が好きだった。

宅悦 それは分かる。

伊右衛門 どうして子供が産まれると、邪魔になったんだろう。

宅悦 普通なら喜んだらう。

伊右衛門 俺は普通ではなかったんだろうか。

宅悦 そうかも知れない、そうでないかも知れない。

伊右衛門 どうしてお梅と結婚しようとしたんだろう。

宅悦

伊右衛門 お岩より若い女の子の方がよかったのかな。そうだったよな。でも誰だってそう思うことがあるよな。喜兵衛はなぜ俺とお梅を一緒にしようとして、ああまで一生懸命になったんだろう。お梅が俺が好きだった。普通なら若い娘が俺のような男に惚れたならあきらめるように諭すものだ。きっと諭しただらうな。だが、ああやって娘の願いを叶えさせようと、形振り構わず、鬼のような気持ちになって、お岩に葉さえ盛ろうとした。そして盛った。なぜだ。

宅悦 わからん。

伊右衛門 わからん。

宅悦 多分、孫が可愛かったんだろう。あんたよりも。

伊右衛門 俺よりもか。そうかもしれん。それにしても、お梅はこんな男になぜ惚れたんだろう。

宅悦 おそらく、お前の暗い部分に引かれたのさ。第一、お前は美男子だ。そしに危ない男だ。

伊右衛門 俺はお梅をお岩の布団の上で愛しようと思った。ところが、あのお梅というガキは俺以上にそれを望んでいた。そして俺を挑発さえした。わかるか。

宅悦 分かるさ。あんたは意識的に自分を狂気の世界に追いこんだのさ。あの小娘は趣味の悪い夢の世界で生きていたに過ぎないのだ。

伊右衛門 確かに、気が狂っていたんだ、あの時は。心を癒やすことが必要だったんだ。

宅悦 癒せたかね。

伊右衛門 わからん。でもお岩の布団で寝ようと決めたとき、気持ちやすーと楽になった。悪いことを積み重ねると、だんだん強い悪が必要になる。あがいてもあがいても強い流れに引き込まれていく。そういうのが見えてしまうんだ。あらがいきれない。生まれついたときから、いや物心が付いてきたときから、自分の姿が見えてしまう。人の前では強がり言っている、一人になると強い流れに流される自分が怖いのだ。

首が飛んでも動いてみせらあと、と言わなきゃわめきたくなっちゃうのさ。俺は何人殺したのか。ことによったら一人も殺していないのかも知れない、と思いたくなる。そして夢を見るように殺してない、伊右衛門、お前は一人も殺してないと、自分に言い聞かせたときもあった。そうすると心が癒やされる瞬間があった。しかし現実には殺してるんだ。そうだよ。

宅悦 ああ、六人も殺してる。みんなも生きていたかったろうな。

伊右衛門 それを言うな。死にたかった奴は一人もいなかったはずだ。お岩は可愛そうなことをした。宅悦、どうして止めてくれなかったのだ。

宅悦 お岩さんは可愛そうだった。お前のやり方は許せない。

伊右衛門 なぜだ。なぜ、お岩をああまでなぶったんだろう。ややを身籠もったお岩に言いたい放題、悪口を言った。陰険な顔をして、声をとんがらかして、罵詈雑言を浴びせた。ことばを吐き出すにつれてますます激してきた。ついには自分が制止できなくなり、言わなくてもいいことまで、すらすら口をついて出てきた。黙って耐えているお岩が憎くなった。泣くお岩が憎くなった。すがって頼み込むお岩が憎くなった。いじめて、いじめて、いじめ抜くことが快樂になってしまった。お岩がいなければもっと自由な生活が出来ると思えなくもなかった。出世だって可能だった。何でも出来ると思えた。ただ自分を解放したかった。それを邪魔しているのが、止めているのが、お岩だと考えてしまった。

なあ、宅悦、どうして止めてくれなかったんだ。

宅悦 止められたかな。止めたらやめたかな。

伊右衛門 止めてほしかった。この腕を切り落としてでも止めてほしかった。

宅悦 俺だって生きていたかったからな。きっと邪魔をしたら、お前は俺をも殺したろう。俺は価値のない男だからな、お前から見たら。

伊右衛門 待つか。待つしかないだろう。

宅悦 待つ。何をだ。

伊右衛門 何かをだ。何を待つのか、俺にもわからねえ。

宅悦 ここでか。

伊右衛門 ここでも、どこでもいい。

宅悦 いつまでだ。

伊右衛門 わからねえ。

宅悦 どうしてだ。

伊右衛門 それもわからねえ。ただ待つだけだ。

宅悦 雪は止みそうにない。

伊右衛門 ……。

宅悦 伊右衛門……。

伊右衛門 ……

宅悦 俺は、ずっと、思っていた。俺がお前の、父親だったとしたら……

伊右衛門 つまらねえこと、考えたもんだな。

宅悦 つまらねえこと考えたもんだ。伊右衛門……

伊右衛門 何だ。

宅悦 殺してやろうか。

伊右衛門 止してくれ。死ぬときは自分で死ぬよ。

宅悦 お前にできるかな。

伊右衛門 出来ねえでどうする。

宅悦 信用しよう。だが、困ったときは、そう言えよ。

伊右衛門 ありがとうよ。

宅悦 少しや、素直になったな。さっき、何かを待っていると言ったが、きっと来るんだな。

伊右衛門 さあ。

宅悦 伊右衛門、禅問答みてなことお断りだ。少し前までは、情け容赦なく切ったり、川へ人間を蹴落としていたのに。

伊右衛門 それはそれだ。いまは動くに動けねんだ。見えるのは、俺が殺した人だけだ。お岩がそこに座っている。お梅がそこに座っている。喜兵衛はその出入り口の前に座っている。小平はそこだ。お袖はそこ、小平はあそこ、お弓はお前の後ろだ。みんな目を閉じて黙っている。

宅悦 伊右衛門、お前狂ったな。

伊右衛門 そうかもしれない、そうでないかもしれない。

宅悦 あの怒りをどこへ捨てたのだ。この世は不公平だ、報われねえ、生まれたときから差別がある、おれにや夢がある、きつと……

伊右衛門 いろいろ言ったな。偉くなってみせる、金がほしい、金があれば出世もできる、人に使われねえですむ、この世は間違っている、みんなが何らかの悪をやっている、俺も小さな悪ならやっていい。まだあったか。

宅悦 偉い侍を見返してやりてえ。それからお袋だけにや、頭があがらねえ。だが、お袋のような悪だけにやなりたくねえって。

伊右衛門 お袋は別格の悪だ。あの人は小さな悪をいとも簡単にこなしてしまう。しかし自分のためにや決してしねえ。いつも親父のため、子供のためだ。いまだっておれのためにや、スラスラと嘘をつく。仏さんだって、お天道様さんだって平気で騙してしまうんだ。

宅悦 ところでまだ待つのか。

伊右衛門 それしかあるめえ。

宅悦 ふーん。

伊右衛門 宅悦、お前も待って見たらどうなんだ。

宅悦 まっぴらごめんだ。来るか来ないかわからねえものを待つなんてごめんだよ。

伊右衛門 心を癒やされたくねえのか。

宅悦 しゃれたことを言うじゃねえか。

伊右衛門 俺はもう何にもできねえ。動けば人とぶつかる。ぶつかりゃ、また刀を抜く。そんな力はどこかへなくしてしまった。もう考える力も失せてしまった。だから、ここでじっと待つ。

宅悦 そんなことをしてても、罪は消えねぞ。

伊右衛門 そうだ。罪は消えやしねえ。

宅悦 わからねえ話だ。俺はもう帰る。心の整理が出来たら、お上へこれこれしかじかとすべてを話すつもりだ。心配するな。お前のことは何も話さねえ。ただ自分のことだけをありのまま申しあげるんだ。

そうでねえと、気持ちが落ちつかねえ。伊藤喜兵衛と乳母のお槇が共謀して怪しい薬を親切ごかしにくれたことを知りながら、血の道の薬と偽って飲ませたことの恐ろしさ。そればかりか、いくらおめえに脅かされたからとて、押しつけられた一分金に目がくらみ、お岩さんを口説いたことがうらめしい。

伊右衛門 迷惑を掛けたな。お前がそれほど心の優しい男だとはつゆ思わなかった。

あの地獄宿を嬉しそうに切り回してたからな。ぼやくな。人生が人をころがしてくれるのさ。さあ、ここで一緒に待とうじゃないか。

宅悦　　ごめんだね。自分の考えで生きなきゃ損だってことが、お前のおかげで分かりかけたよ。人様の懐や、人様の命令で生きたくわねえ。自分で考えて、自分の足を使って歩くさ。馬にも駕籠にも乗りたくねえ。自分の二本の足で歩くのさ。俺は俺の道を生きようと思う。

伊右衛門　　そうかい。親父さん、いや、父上、これが親子の別れかい。

宅悦　　ありがとう。やっと、俺の気持ちを汲んで、芝居をする気になったか。息子よ、おれは俺の道を生きる。達者でな。

伊右衛門　　父上。

宅悦　　達者で暮らせよ。

伊右衛門　　待って下され、父上。お願いだ、父上、待って下され。

宅悦　　待つのはそっちの仕事だろう。あばよ。

宅悦が退場する。時の鐘。

お岩の姿がスクリーンの上に浮かび上がる。

お岩　　これ、こちらの人。

伊右衛門　　誰だ、俺を起こすのは。

お岩　　チェ、恨みは尽きじ、こちらの人。

伊右衛門　　ヤヤ……、そちは女房お岩。

お岩　　エエ、ねたましや。

伊右衛門　　……

お岩　　わが黒髪も、もろかつら、漂う水に浮かみもやらず、恨みははれぬこちらの人。ともに奈落へつれ行かん。来たれや来たれ。

伊右衛門、ハット目覚める。

この時、コーラスが捕手の役となって登場する。

コーラス　　伊右衛門、御用だ、御用だ。

伊右衛門　　お前たちだけには自由を奪われたくねえ。引っ込んでろ。

コーラス　　おとなしく縄にかかれ

伊右衛門　　くどい。おれは正義を犯しながら正義面をしている奴が大嫌いなんだ。そういう厚顔無恥な奴に無批判に仕える奴も大嫌いなんだ。失せろ。

照明が一気に消える。仏壇のお灯明だけがついて

いる。スクリーンに、白馬にまたがった千手観音の
映像が映る。捕手は驚いて逃げ去る。

「人間を豊かにしよう」

俺の後に生きる人間たちよ、同胞たちよ
俺を特殊な人間だと決めつけるな
人間はいろんなことをする
君たちだって、宿命の嵐に巻き込まれるかも知れない
そこは文字通り泥沼の世界だ
目を開けることも息をすることもできない
蓮根の畑に身を沈めたことがあるかい
底なしで、地下の魔力がドロの中へと引きずり込む
絶望に支配されて、あがくことだけしか方法がない
俺を笑うのはやめてくれ
俺に同情するのもやめてくれ
今日があったから明日もあるだろうと無邪気に思いこむな
みなさん、俺を手本にしろ
そして軽はずみなことをするな
それから 御仏に手を合わせ、祈ってくれ
俺が救われるようにと

御仏に手を合わせ
お岩が救われるよう祈ってくれ
御仏に手を合わせ
ややのために祈ってくれ
御仏に手を合わせ
お梅のために祈ってくれ
御仏に手を合わせ
喜兵衛のために、
お弓のために
お袖のために
小平のために
最後にもう一度言う
お岩のために
子供のために
祈っておくれ

雪が降り続く
この雪はわたしの心を浄めてくれるだろう
しんと降り積もる雪よ
罪深い肉体を氷室に閉じこめておくれ
許しを乞う力を失ってしまった心を
憐憫のことばを忘れてしまった口を
白い雪で覆い尽くし
二度と人目に付かないように埋没してくれ
後に、多くの人がある上を歩み
白い雪の道を作ろうとも
決して雪の戒めを解かないでくれ
白い雪の道は永劫へと続く
道を歩む人間は
先達の悪や善や、悲しみや喜びや、欲望や絶望を
乗り越えて生きなければならない
無知と思いがりと反発が
俺を引き決して返せない山へいざなった
同胞よ、俺を戒めにしろ

盛り場で、女の子は乳房を誇張する
軽薄な男たちは触れなんと手を突き出す
女の子は腰をゆする
豊饒で科学を超えた美しさに
男たちは狂乱する
盛り場を粉雪のように徘徊する乙女たちよ
君たちは人間を豊かにしていると思っているか
君たちは地球を豊かにしていると思っているか

泥棒たち、銀行強盗たち、人殺し、ビルの掃除人たち、運転手たち、
皿洗いの人たちよ、ホームレスの人たち、売春婦たち、淫売たち、薬
を売る人たち、詐欺師たち、
君たちは人間を豊かにしていると思っているか
君たちは地球を豊かにしていると思っているか
お願いだ、俺の後を歩んではならん。俺の先を歩むのだ

だが伊右衛門より、高潔と思う人たちよ
政治家や資本家や策士たちよ
美食に飢えた紳士やきら星の如く宝石を身につけた淑女よ
少しでも力を誇示し、権力を誇示し、富を誇示し、地位を誇示し、美
貌を誇示し、若さを誇示し、知識を誇示し、知名度を誇示する人たち
よ

雪の白い道を歩いて、破滅せよ
行きだおれて、俺の所へ沈没してこい
でももし許しを乞うなら
許してやれないものでもない

伊右衛門 俺が待っていたのが死なら、喜んでついていく。もし待つものが死
でなかったら、後は何だ。

正面のスクリーンに雪が降り続く。

伊右衛門 ご最員の観客のみなさま、いよいよ
伊右衛門は待ちに待った宿命に対面します
芝居はまもなく終演します
みなさまはお帰り下さい
何も気になさらず、明日のことを考えればよいのです
この芝居には解決はなかったのです
教訓も啓発も娯楽もなかったのです
この芝居の欠点は、この社会には正義はないのと同じです
裁く力と知を持った機関がないのと同じです
やむを得ないのです

コーラス いやいや、演劇では悪は必ず滅び、正義が勝たなければなりません
勧善懲悪とは大衆が求めていた真実です
本当でしょうか
このただ一つの解釈で当時の人々は満足してたのでしょうか
俺の数々の悪行は万死に値するとはいうものの
正義は裁ききれなかったはずです
そこで新しい演劇は、人類の未来を考慮して
将軍家の使者の早馬を登場させます

エピソード「早馬の使者が登場する場」

コーラスの長 いや待て、伊右衛門

降りしきる雪を蹴散らして
幕府の使者が見える
ソラ、聞こえるだろう
ひずめの音が
馬のいななきが

白い馬にまたがった宅悦が使者として登場。彼は
どう見ても宅悦だが、鎧甲に身を固め、墨黒々と
「上」としたためられた手紙を右手に掲げて登場す
る。彼は馬上から叫ぶ。

宅悦 待て、待て、塩冶の浪人、民谷伊右衛門、しばし待たれよ。そちが
犯せし大罪を許すことはできないが、さりとてこのまま見捨てておくことも
できぬ。大名、御家老、旗本をはじめとして、多くの家臣たちの日頃の不始
末に目をつぶり、そち一人のみを厳罰に処すことははばかられることであ
る。

伊藤喜兵衛、その娘・後家お弓、乳母お禎、また孫娘・お梅の所行は人間
にあるまじき奸計をもってお岩を陥しいれなんとした。高家への再就職を口
実接近し、働き盛りの男の人生を破滅へと導いた所行はこれぞまさしく万
死に値する。

ただ、伊右衛門、その方の、妻お岩への言動は許しがたけれど、打ち首の
上、さらし首の刑はこれを認めることあいならぬとお達し。お上は、塩冶
の浪人、民谷伊右衛門に高い地位と十分な知行を与え、お岩を弔い、仏道に
精進することを命じなされた。

ただ今から一年以内に四谷または浅草、向島、吉原、品川、新宿なり、好
みの色町に都合一千の寺を建立し、恋に破れ、男たちに虐げられし女性や家
庭の不幸に苦しむ女性たちを救うべし。全国一千の寺の当主としてそちが天
命を全うせよ。費用はいくら掛かってもかまわぬ。

またそちが朋友、宅悦は可愛そうな人物である。お上は彼に特別のお気持
ちをお持ちなされ、彼奴に「按摩日本一」の看板をかかげることをお許しに
なされた。寺の門前に店を設け、女性には一切無料で奉仕するようご下命あ
った。

コーラス　こんな風に終りはきっとハッピーエンドになるんだよ。人生は以外に簡単なんだよ。必要なのは、平和だよ。白馬に乗った使者が来てくれさえすれば、人生はいつも仕合わせなんだよ。

雷がとどろき、大ドロが鳴り渡る。お岩が蛇の仮面とコスチュームを着て登場する。

お岩　それはないでしょう。白馬の使者、あなたは宅悦どのでしょう。

宅悦　いえ、そうは一概に言えません。

お岩　あなたはいつもそうやって、事を丸く納めるために人に使われてしまう。わたしのために一生懸命に尽くしてくれたことは感謝するわ。少しばかり悪で、人の良いあんたはいつも矛盾を抱えて生きている。心の優しいあなたは、伊右衛門に命令されれば、あたしと駆け落ちする役を演じようとした。いまここでは、白馬の使者を演じて劇を終わらせようとしている。サア、誰に頼まれて、ハッピーエンドにしようとしているの。サア、言いなさいよ。

宅悦　さあ。

お岩　さあ。

宅悦　さあ。

お岩　宅悦、答えなさい。

お岩は宅悦を白馬から引きずり下ろす。

宅悦　誰がハッピー・エンドにしようとしたか、本当に分からないんです。ただ動機は単純にお岩さんのお化けが出てきて、オドロオドロの芝居にしてもメッセージがなさすぎるとみんなが考えたからです。だから、お客さんにも一人の男の人生を通して、つまり伊右衛門の人生を通して、人間の意味を考えてもらうことが目的なんです。

お岩　じゃ、なぜ一人の女の人生を通して、人間の意味を考えようとしなかったのさ。

宅悦　それもそうですね。

お岩　あなたはいつも人に説得されてしまう。もっと男らしく自分の強固な意見をもてないの。

宅悦　だから・・・「男らしく」っていう表現はセクハラじゃないかな。

お岩　何ですって。

宅悦　いえ、別に。独り言を言っただけです。

お岩 白馬の使者さん、お岩の人生をどうしてくれるの。あんたは小者で、弱い人。伊藤家から差し入れされた薬を、顔を醜くする薬と知っていながら飲ませた。わたしが髪に櫛をいれるにつれて、恐ろしい二目と見られない形相に変わっていく瞬間を目撃した。

宅悦 ヒェー。

お岩 「髪すき」の音楽を聴かせてやろうか。

宅悦 やめて下さい。

お岩 こんな会話をしていると、あんたが嫌いなオドロオドロの世界に入りこんでしまう。

宅悦 そうですよ。

お岩 調子に乗るんじゃないよ。宅悦、こんな結末にした真犯人は誰よ。

宅悦 さ、作家です。この本の作家です。

お岩 古いわね。その手はギリシャ悲劇やシェイクスピアの本でも使われているわよ。こんな作家など抹殺しようと思えばすぐにでも出来るわ。問題はこの作家の後ろにいる者、お前たちの後ろにいる者は誰かと聞いているのよ。

宅悦 (後ろを振り返ってみる)

お岩 お止め、宅悦。

宅悦 へーい。

お岩 宅悦、閻魔様の看板をかかげて、きゅうをすえる商売をやっていたお前さんはこのからくりをぼんやりと知っているのさ。知っていながら恐ろしいからちゃんと見ようとしないんだ。お国のため、お家のため、自分のため、みんなが少しずつ悪を働く。宅悦、お前が水揚げをだまし取っても可愛いものよ。天下がひっくり返りはしない。だが、お国や大金持ちが悪を働いたら、たくさん人間が犠牲になる。そのお国だって、お大尽だって仲間の悪でひっくり返されてしまう。塩冶の殿様がいたとえだ。そのために、お岩の父親も伊右衛門も無一文になってしまった。妹はついにお前さんのお世話になって客を取らざるを得なかった。

伊右衛門は思量の浅い人。塩冶が滅び、あたしに飽きると、さっそく高家に仕える気になった。高家だって滅びることに気づいていないんだ。そのためにどんな誘惑にも簡単に落ちてしまう。お国も、伊右衛門も、喜兵衛も自分が可愛いんだ。自分のためなら人を踏みにじってでも生きて行こうとする。

宅悦 どうして難しいことを言いなざる。おっしやってる……

お岩 宅悦、これまでたくさんの女性が虐げられてきたのです。抗議の声をあげることを許されていなかったの。だから閻から閻へと葬り去られてきたんです。クリュタイメーストラは地下の女神のもとで復讐を誓いました。清姫は安珍に復讐を誓いました。女性の思いは男性が忘れた時でも生き続け

ているんです。

宅悦 はい。怖ろしいことです。

お岩 本当にそう思ってる。

宅悦 もちろんです。

お岩 じゃ、白馬の使者として再登場し、お岩や女性のために幕切れをもう一度やり直してくれないかしら。

宅悦 そりゃ、やらないわけじゃないけど、お気に召すかどうか。わたし真面目にやりたいんです。

お岩 あなたはいつも真面目な人ですよ。嘘が下手で、不器用な人です。やってくれますか。

宅悦 もし上手くいかなかったら、恨みっこなしですよ。

お岩 いわ、その時は次の公演でやりなおしてもらおうから。さあ、急いで準備を。

宅悦 へーい。

コーラスが位置に着く。宅悦は再び白馬の使者として乗馬する。ひずめの音が聞こえる。

コーラスの長 いや待て、お岩
降りしきる雪を蹴散らして幕府の使者が見える
ソラ、聞こえるだろう ひずめの音が 馬のいななきが

白い馬にまたがった宅悦が使者として登場。墨黒々と「上」としたためられた手紙を右手に掲げて登場する。彼は馬上から叫ぶ。

宅悦 待て、待て、塩冶の浪人、民谷伊右衛門、並びに同人妻お岩、しばし待たれよ。

民谷伊右衛門、そちが犯せし大罪を許すことはできないが、さりとてこのまま見捨てておくこともできぬ。大名、御家老、旗本をはじめとして、多くの家臣たちの日頃の不始末に目をつぶり、そち一人のみを厳罰に処すことははばかれることである。ましてや夫、民谷伊右衛門のために犠牲となったお岩を捨て置くことははばかれるところである。お上はお岩の悲劇を理解されて各藩に女性問題特別検討委員会を設置することを決定した。同時に、

この事実を改めて糾明し、お岩の魂が訴えようとする本旨が正しく伝わるよう、全ての機関の総力を挙げて通達するようお命じになられた。

これで、よろしいですか。お岩さん、これでいいですか。お岩さん、どこにいるんですか。返事をして下さい。

お岩 こんな人生なんてなかなかありません。人生はいつも矛盾だらけ。

良い人は陥れられ、悪い奴が浮かび上がるのです。その不条理は今日この舞台で見た通りの穴あきだらけ。皆さんの人生の終わりは惨めにちがいません。みなさんが踏みつけられたとき、踏みつけ返したら、きつとおとしまえが求められるでしょう。その時白馬の使者が来ることはまずありません。

だからといって、世を悲観してはいけません。世に逆らってもいけません。不正には目をつぶり、身に合わない立身出世を願ってもいけません。小物は小物の、あるがままの生活をするんです。悪が栄えたからとて、あんまり目くじらを立てるものではありません。

全員が舞台前へ出てきて歌う。

「人間であるための真実」

全員

不正をあんまり告発するな
やがて風化がやってくる
私たちは忘れっぽいだ
夜空に雪が舞っている
私たちの心は闇なんだ
私たちの心は寒いんだ
この暗さ、この寒さを考えて
不正をそっとしておこう
みんなが病んでいるのだから
実はみんなが真実を知っているのだから
勇気のない奴らだけが
真実、真実、正義、正義
とわめくのさ
それさえ知っていれば最低限人間でいられる

— 幕しまる —

以下の『東海道四谷怪談』を参照し、使用させていただいた。ただし、仮名や漢字の使い方は、小林が原本を生かしながら今日的な使い方に改めた箇所が少なくない。お詫びしつつ、深く感謝申し上げます。

「鶴屋南北全集」第十一巻『東海道四谷怪談』三一書房
「名作歌舞伎全集」第九巻 東京創元新社
『東海道四谷怪談』河竹繁俊校訂 岩波文庫
歌舞伎オン・ステージ18 『東海道四谷怪談』白水社